



遅かったかもしれない。今、ようやく、私は冷えた頭で、この人の言葉を読むことができるようになった。福島を故郷として持つ、和合亮一の『廃炉詩篇』。臆病な詩の世界では、震災後、この詩人の詩に取り扱った注意のラベルが張り付いた印象もある。しかし本詩集の言葉は圧倒的だ。崩壊後の、押し黙った、終わりのもせず始まりもしない現実の

詩人 小池 昌代

詩

① 廃炉詩篇 和合亮一著 (思潮社・2000円)

② 闇風呂 細見和之著 (澤標・1800円)

③ ぴーたーらびっと 細田傳造著 (書肆山田・2500円)

日本語を相対化する眼差し

気という名で置き換え、他の読者と共有したい。今年出た、多くの詩集に死者たちの存在がゆらめいて、孤独がのぞく。詩を書く自分という中心があり、周囲を囲む言葉は軽妙なのに、中心だけが、不意に重い。今までの細見の詩には、あまりなかったものだ。「父の詩」という一編には、「父の生涯のなかのただ一行の詩」として「書らしの家具センター細見」という看板の文字が書き付けられている。

現実刻む圧倒的な言葉

物量感を、優れた喩で刻みつける。書くべき宿命を言葉に感じた。若すぎない若さを持つ人だけが、為すことのできる仕事である。どこの一編も冒頭からい。『深夜に大型バスが』と、その痛み。それを今、勇

高子は、桐生の織物工場に生まれたようだ。はじける言葉、群馬弁が、工場ながら、織り上げられていく。そこから見えてくる風土と人。女工さんや織り子たち。一東電が、ユニクロ着込んで「さあ、どうする。艶やか、特異な詩集である。松浦寿輝『Afterward』には、自我の消えた、ゆるやかな言葉の流れがあった。この詩人の言葉に以前感じた「壁」のようなものが溶解している。内側の結晶よりも外部への流れと透が選ばれている。「にんげんとはそんないびつな動

物なのだ」。事後の言葉をここに読んだ。ばくきょんみ『何処何様如何草紙』には、一編の詩と、それを書き終えたところから始まる物語とが同居。同居の間から見えてくるのは、不安定で自由な詩の言葉の本質。他に、深い哀しみの宇宙間、野木京子の『明るい日』、文月悠光『屋根よりも深々と』には光の眼差しが。繊細な成熟、新川和江『ブック・エンド』など。『広部英一全詩集』は没後9年の集大成。自然と母と自己が融け合う。観照の眼差しが心にしみた。

細田傳造の第2詩集『ぴーたーらびっと』もまた、ユーモアに包まれた柔和な『ベットと織機』の新井